

特別講演要旨

東南アジア特にタイ国の畜産

八戸芳夫（北大農）

熱帯圏の視察だから、どうせなら最も暑い時季にと、3月中旬に出発、暑熱の中を2ヶ月間、タイ、インド、スリランカ及びインドネシアとあるき、その中でタイには40日間も滞在して大学関係、試験場、種畜場、農協関係及び数多くの畜産専門農家を視察できたので、今回はタイ国の畜産事情を中心に御紹介したい。

視察した印象を卒直に要約すると以下のとおりである。

1. 研究（普及）機関について

大家畜畜産については、種畜場などのように伝統的に古くから事業をつづけてきたものを含めて、家畜・圃場などの準備が終了して、早いところでは一部成果を生みつつあり、全体としてはこれから本格的な研究なり増殖に着手しようという態勢にある。家畜の頭数などの物理的規模では国際的水準にたしてても遜色はない。中小家畜については規模は勿論、その飼養技術は高レベルにあると言えよう。

しかし、将来の発展のための研究機関について問題は多い。即ち

(1) 研究器具・資材の著しい不足

研究ないし調査に必要な器材類の不足は著しく、家畜・圃場など十分な規模で出発していながら、それらの材料を十分に生かしきれないうらみがある。

(2) 専門的人材の不足

歴史的にも獣医・畜産分野に人材難が続いていると言われているが、最近の大家畜畜産の研究目的や性格また普及事業の性格からみて、畜産プロパーの専門家がきわめて不足している。種畜場関係はともかく、研究機関における質的及び量的人材難は著しく、これらの機関の物理的規模に比べると驚くほどの人材不足である。これは公務員採用上の制約から、畜産に割当が少なく、また最近では研究畑に女子の採用が多くなり、このことが長期的には研究人事運営上問題になることが懸念されている。

(3) 研究成果の発表

タイは他の熱帯諸国とちがって、研究成果は全て自国語で発表されるので、外国から目につき



にくい点がある。サンタ・ガートルーデスとアメリカン・ブラーマンの比較などの大家畜の研究情報は東南アジアでは先駆性があり国際的に見ても有用な価値をもっているものが有効に広報されていないことは甚だ残念である。

(4) 現在の研究の性格

研究とか調査の性格は、当面の社会的必要性から、農民がまず生産性の向上に向って慣行的家畜飼養を改善するための、初歩的ではあるが効果の大きいデモンストレーション的なものが重要な部分をしめる。また、研究そのものでは、大きな技術の当面の方向づけに必要なもの、例えば北東地方の肉牛改良のための品種の決定にみられる性格のものが主流である。それだけに研究が完成されれば、実際的貢献性は大きい。技術分野のそれぞれの局面について部分技術の要因解析的なものは次の段階の問題であろう。

2. 国際協力のあり方

大家畜に関するかぎり、タイ・デンマークプロジェクトを例にとってその成功の原因をみると、長期間の協力と現地派遣責任者に対する本国政府の大巾な権限移譲によって、現地の条件に即応した柔軟な協力を可能にしたことである。また見のがすことのできない点は事前計画の緻密性である。

3. 普及活動

タイ・デンマーク、タイ・ドイツプロジェクトの乳牛増殖事業、北東部の肉牛改良事業など農民と密着した成果があげられている。この成功の原因は長期的かつ徹底的という点にあると言える。

4. 農業教育機関

コンケン大学、チェンマイ大学等が創設され農業高等教育には努力が払われているが、しかし目下のところは教職員スタッフは年が若く、また空席若しくは外国留学中が著るしく多い。獣医とか畜産の専門は学生に人気がないと言われ、人材難は当面解決されそうもない。

5. 民間企業の発展

商業資本による肉牛・豚の増殖事業は現在の農民の姿とは全くかけはなれた大規模な経営合理性型で行われている。しかし、これらが永続的にこの国の農業の中に定着していくためには、種畜の供給や新技術の展示・普及などを通じて農民の立場に立って営農を側面から援助していく姿勢が必要であろう。

6. 研究課題

大家畜に関する研究課題は育種、栄養（飼料基盤を含む）と繁殖についての極めて直接的なものが重要である。

(1) 育種面では、肉牛について北部・北東部でのアメリカン・ブラーマンによる改良の結論が出さ

れているが、南部向けの方針は確定していない。外国肉用種の導入による性能調査がつけられており、これが当面の研究課題になろう。品種の比較、雑種特性の比較につき、ひとつの肉牛として完成していくための審査規準、選抜方法特に雄の選抜方法、改良組織の作りかたなどが同時に研究されるべきである。

水牛では、雑種による改良はあり得ないので、当面は資源調査、優秀個体の選抜、審査規準の作成、雄の選抜方法の確立が急務。

- (2) 栄養面では、乾季に栄養水準が低下することを解決して全般的に生産性を向上することが当面の問題である。直ちに着手すべき研究としては、既存の農業副産物の利用を促進するため、これら資源の栄養価の検討と給与法の確立である。次に牛の改良に伴う至適栄養水準を明らかにして、現地の実情をふまえた飼養標準へとすゝむことが大切である。
- (3) 繁殖の面では、雌雄とも栄養水準の改善による繁殖率の向上がさしあたっての問題であり、次には、季節と繁殖生理との関係を明らかにすることであろう。たとえ現地の環境に適応性を持っているとはいえ、乾季と雨季の大きな変動は牛・水牛に及ぼす影響は大きい。肉牛については当然自然交配が主流であろう。従って、改良のために雄の選抜が行われるようになれば、これまでと違って村落レベルの雄牛の数は制限されざるを得ないが、このために適切な繁殖集団の形成と交配管理技術が必要となろう。繁殖障害の除去とか人為的な繁殖率の向上対策はあとでの問題である。水牛については繁殖行動や生態が充分明らかにされていないので、増殖は勿論改良のためにも至急解明を要する。水牛の人工授精技術は精液性状が牛と異なり、従って保存法が未だ確立されていないので実用レベルには達していない。しかし改良のためには是非共必要である。

7. 日本に対する要望

開発途上国に対する日本の援助態勢が中途半端であるとする批判は到る処で具体的に聞かされた。また、日本とタイとの間の貿易不均衡に対する不満は官民共々いだいている。即ち、自動車をはじめとして各種器械類や日用品のはてまで日本製品を積極的に輸入しているのに、何故に日本はタイの農業生産物特に畜産物を買わないのかという声は畜産局の役人は勿論、農家レベルからも到る処で真剣に聞かされた。

なお、インド、スリランカ、インドネシアについては滞在日数も少なく、夫々の政府の畜産局の役人の案内によるいわば立派な所だけの見聞であるので、農家レベルの事情までは知り得なかったが、夫々の国の事情を簡単に紹介したい。